

# MCC 雑感 2009-3

場所：丸紅本社 1F コンチェルト

参加：11名

## 1) 今月のテーマー IT世界のトピックス

### その1-CPUの進化

インテル、次世代 CPU 「Nehalem」の第一弾を「Core i7」に決定

今後発表する製品にも Core のブランド名を継承・・・この発表は 2008 年 8 月 11 日のことで、Core は、インテルのデスクトップやノート向け CPU が広く採用しているブランド名。現行製品には CPU コアを 2 つ備える「Core 2 Duo」や、CPU コアを 4 つ備える「Core 2 Quad」などがある。今回の発表により、市場での認知度が高まっている Core ブランドを次世代 CPU でも継承することになったわけだ。

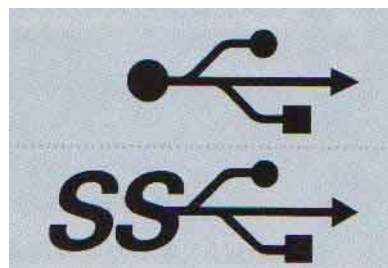
MCC メンバーは私を含めて Pentium 世代だから、Core という名前には馴染みが薄いですが、果たしてこのような超高速の演算機能が我々にも必要なのだろうか、考えたくなくなってしまいました。

### その2-USB-3

USB の標準化団体である、USB Implementers Forum は、2008 年 11 月 17 日に次世代インターフェース規格として、「USB 3.0」（公称 SuperSpeed USB）を確定し、仕様書を公開しました。

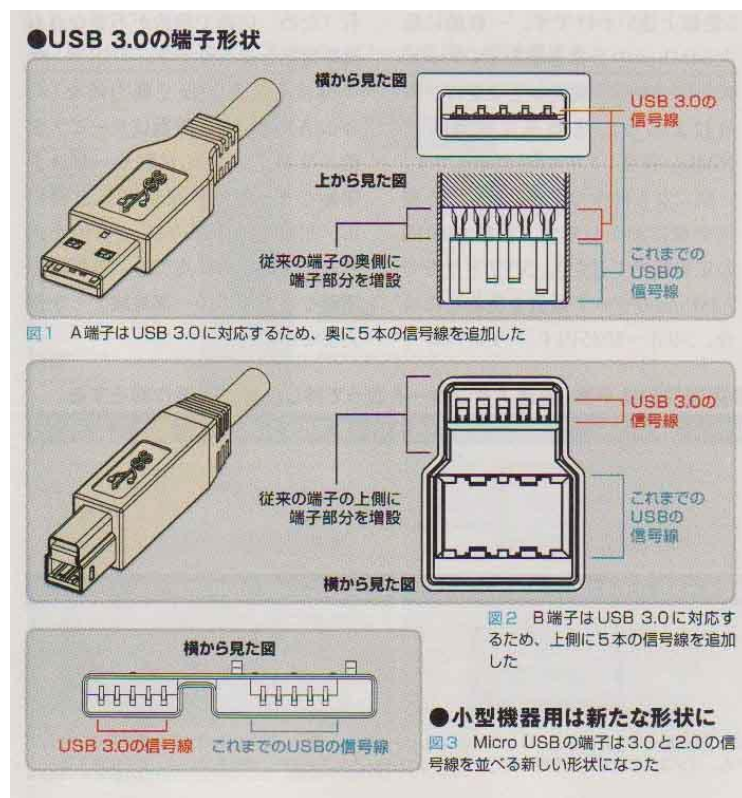
これによると、従来の USB 2.0 の約 10 倍の伝送速度でデータのやりとりが出来るとのことで、最大速度は 2.0 の 480Mbps に対し 3.0 では 5Gbps となります。

対応する周辺機器及びパソコンへの装着は今年の後半からとなりますが、気になる 2.0 との互換性については周到な配慮で確保されるようですから、新しい 3.0 対応機器を従来のパソコンの 2.0 と繋ぐ場合も、逆に 3.0 のポートを持つ新



新しいパソコンに古い 2.0 を装着した周辺機器を繋ぐ場合もどちらの場合も 2.0 として使えます。

つまり端子の形状・サイズは共通で、中の配線が両用になっているのです。



1996 年の USB 登場以前までは、周辺機器の接続は、かなり大変でした。なぜならば、シリアルポート、パラレルポート、PS/2 ポート、SCSI ポートなどの規格を使い分けねばならず、また機器に合わせてコネクタ形状を見分け、正しいケーブルと組み合わせる必要がありました。組み合わせを間違えると機器が壊してしまい、ユーザーに要求される知識のハードルも、今より遥かに高かったです。

そこで、あまりに複雑すぎるインターフェースの統一を目的として制定されたのが「Universal Serial Bus」=USB でした。

共通のコネクタで様々な周辺機器を接続できる USB

- ・ ケーブルを挿すだけでパソコンに機器を認識。
- ・ 接続ケーブルを通じて機器に電源を供給可能（バスパワー）  
この結果 AC アダプターが不要となり、コンセント接続は大幅に楽に！
- ・ 分岐装置（ハブ）を経由することで最大 127 台まで同時接続可能。

さて、ここで私には大いなる疑問が湧いて来てしまいます。

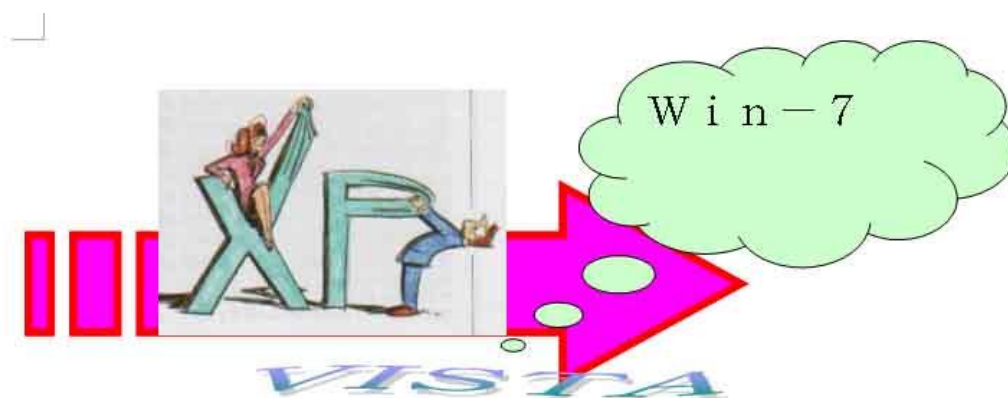
つまり、パソコンと周辺機器とを繋ぐインターフェースの伝送速度はこんなに大きくなってしまっても、肝心のハードディスク及び周辺機器のそれぞれのメディアの書き込み速度はどうなるのでしょうか？

一般的にはハードディスクの書き込みは毎秒70MBとされたものですし、CDやDVDのそれは16～64倍速などというのがありますが、通常は当倍速で作業は行なわれます。

となると、USBの性能だけが10倍にもなっても、両端のハードウェアがそれに追いつかなければ、バッファリングが必要になり、かなり大きなバッファメモリーの必要性を生ずるのではないのでしょうか？

ITの世界では、このように進化がジグザグに進み、やがて遅れている機器が追いついて来て、量産化により価格も下がり、性能が上がっても値段は同じということになって行くわけですが・・・・・・・・

### その3-ウィンドウズのOS



#### A) XPの延長

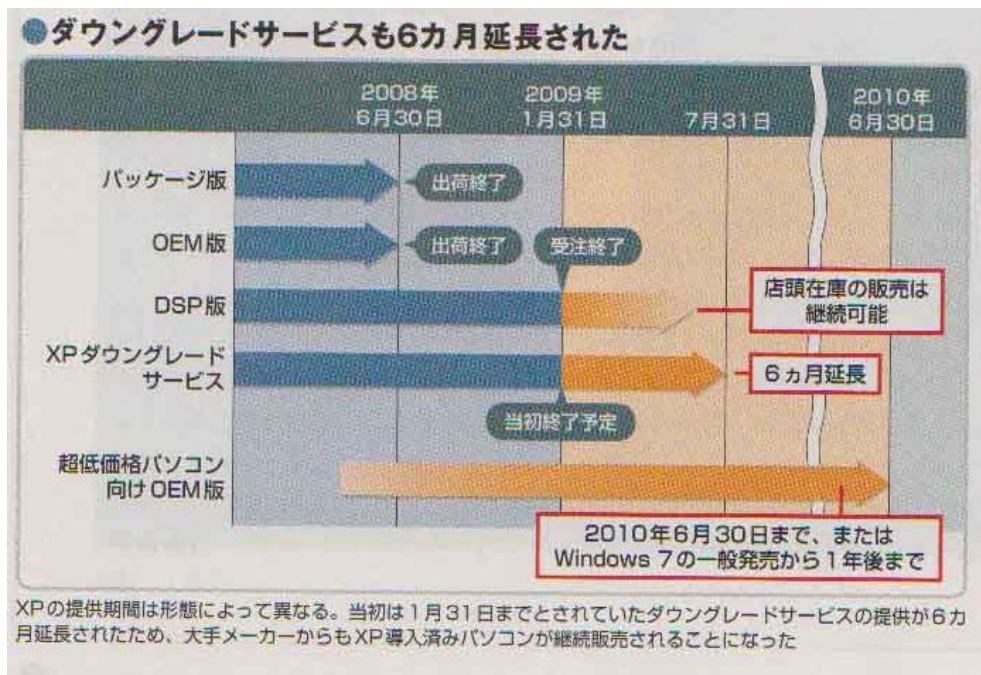
パソコンの買換え周期はこれまで平均3年とされて来た。

ところが、我がMCCのメンバーのパソコンはかなり老化が目立っているのだが、XPの後継VISTAの悪評のために、一向に買換えが進まない。

そうこうしているうちに、XPは今や最長不倒距離を延ばし続け、何時まで経っても消えないではないか！

何となくXP-Vista-7のハザマに経って、老い先の短い我らには悩みも深まるばかり・・・・・・・・！！

XPは何だかんだと延長しており、2008年1月の終了宣言は一体何だったんだろうか？



**XPダウングレードサービス：**

Vistaをプリインストールしたパソコンに、XPへのダウングレードをするためのメディアを添付したり、ダウングレードした状態で出荷するもの。2009年1月終了の予定が更に6ヶ月延長された。

**DSP版XP：**

パソコンの製造・販売業者が、メモリーなどの部品とセットで販売するもの。OEM販売の一種、自作ユーザーなどの為が主であるが、マイクロソフトが1月末に販売停止していても、在庫品は引き続き売られている。

**ULCPC向けOEM版：**

こちらは2010年6月30日まで、或いはウィンドウズ7の発売から1年後までとされている。

元来ULCPCはハードディスクを使わずSSD（Solid State Drive）と呼ばれるフラッシュメモリーを使うことで、小型軽量化が図られたが、その価格の障壁の故に4GB程度でスタートし、Vistaを積むことが難しかったので、XPが使われたのだった。

しかしながら、その後HDDの小型化、SSDの大容量化も進んで、ミニノートと云われるパソコンは爆発的に売れたので、マイクロソフトはXPを止める

に止められない状態なのだ。

留意すべきは、このXPのサポート期限で、メインストリームサポートは2009年4月14までとされている。

つまりセキュリティ関連以外の修正プログラム更新などは有償、無償を問わず終了してしまい、それ以後はセキュリティ更新プログラムのみが2014年4月8日までは受けられるということになっている。

やはり、遅かれ早かれXPにしがみついてはいられなくなるということである。

B) ウィンドウズ7の登場は？

製品名の中の7の由来は、

Windows 1.0

Windows 2.0

Windows 3.x

Windows 4x (95, 98, 98 SE, Me)

Windows 5.x (2000, XP)

Windows 6.0 (Vista)

に続く7番目のクライアント向けのメジャーリリースであること。

ただし、バージョンは6.1と表記されており、Windows NTとしての「バージョン7」では無い。マイクロソフトのWindows開発チームからも、Windows 7はVistaを基に改良したカーネルが使用されており、新規開発は行われていないことが明らかにされている。

リリースの状況としては、Windows 2000 (バージョン5.0 開発期間4年) のマイナー・アップデートであったWindows XP (バージョン5.1 開発期間1年) と相似形をなしている。

つまり、XPは2000の改良型に過ぎなかったのだが、予想を遥かに超える長持ちをした、他方Vistaは入念に作ったのに、失敗したので、これを一寸手直ししようというのがWindows 7というわけで、柳の下の泥鰌は二回目も当たるかどうか・・・??という代物なのだ。

ところで、Microsoftは、Windows 7を2010年初頭に日米同時発売する計画で、新OSの開発は日本語版、英語版とも同時に進められている由。

発売時期は、現行OSのVistaが発売された2007年1月から3年後となる10年1月ごろを予定しているとのことである。

#### その4-ミニノートの躍進

電子情報技術産業協会（JEITA）の発表によれば、昨年第3四半期（2008、10～12月）の国内パソコン出荷台数は214万4千台と前年比98.8%で金額的には2363億円（同88.2%）だった。

未曾有の不況の中でもパソコンはそれほど売上げが落ちていないのだが、金額的にはノートパソコンの割合が大幅に増大しているために、ややダウンしていることを示している。



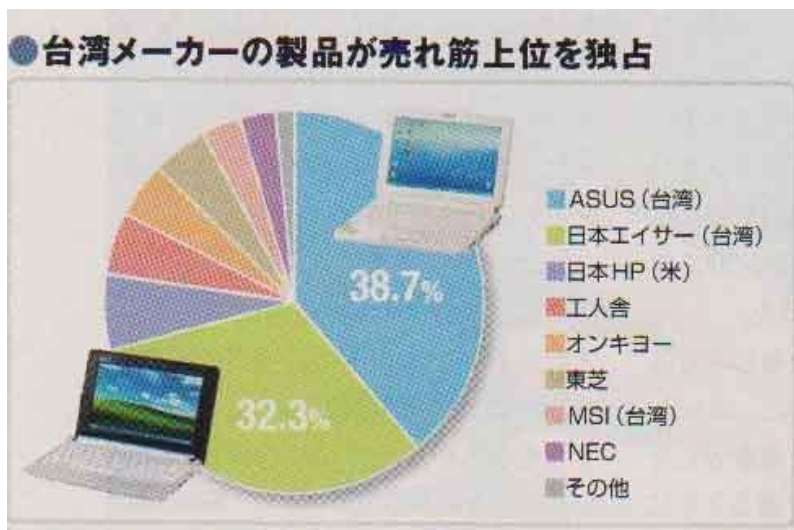
更に云えば、ノートパソコンは断然ミニに食われているようだ。ミニノートは昨年3月E-モバイルと組んで、ゼロ円パソコンという衝撃的なデビューをしたが、これが次第に内容を充実させて、単なる通信機器からミニノートパソコンへと変貌していると考えられ、一部には「ネットブック」という言葉が流通し、イギリス某社が商標の使用禁止

を訴えたりもしている。

その中でも、台湾製のミニ・ノートパソコンの売れ行きは好調のようである。少し古いデータだが昨年末の売れ筋トップテンは

1	日本エイサー	Aspire one	8.9 型	160GB	¥47,789.00
2	ASUS	Eee PC	10	160	51,360.00
3	日本エイサー	Aspire one	8.9	120	40,102.00
4	ASUS	Eee PC	10.2	16(SSD)	63,565.00
5	ASUS	Eee PC	8.9	12(SSD)	48,192.00
6	東芝	NS100	8.9	120	55,239.00
7	ASUS	Eee PC	7	4(SSD)	26,983.00
8	オンキヨー	SOTEC	10.1	120	48,449.00
9	ASUS	Eee PC	8.9	16(SSD)	40,257.00
10	日本HP	HP2133	8.9	120	34,740.00

台湾勢は何とベストテンの中に7機種も入っているのだ！！



この伸長の要素として考えられるのは、

- 1) インテルの超小型CPUアトムのバックアップ
- 2) SSDの大容量化と、HDDの小型化
- 3) 光ドライブの不備を補うUSBソフトの登場



ソースネクスト社は、ウイルス対策ソフトゼロを始として、将来すべてのソフトをCDではなく、USBに載せて販売する方針を打ち出している。

(これが出来るのは、1GBのUSBメモリーがコスト数百円にまで下がったからなのである)

だが、ミニノート、或いはネットブックはパソコンの進化と逆行している無理な軽量化、廉価を迫るもの、所詮一過性の際物ではないだろうか？

その5-ロケーションフリーが陽の目を

イ) インターネットと著作権を巡る画期的判決

テレビ番組をインターネットを通じて海外に転送するサービスについて知的財

産高等裁判所は今年1月、初めて適法の判断を示した。

裁判では、インターネットに接続した子機を使って、国内に設置した親機を操作し、録画した番組を海外で楽しむというサービスの適否を争ったのだが、地裁段階では、親機が業者により一括管理されていることから、業者を複製の主体と認定し違法と判断した。しかし、知財高裁は著作権法で認めている私的複製にあたりと認定した。

これはソニー製のロケーション・フリー（所謂ロケフリ）が、これまで放送局側から様々な非難、中傷、妨害を浴びていたものを、始めて適法と看做した画期的な裁判だったのです。

ソニーのような超一流企業の製品ですが、これまで数年間ロケフリは何となく日陰の存在でした。しかしインターネット回線の大進化により、ロケフリファンは激増し、更にはこれを商売にする業者も数多く出現するに及んで、数々の揉め事を経て、遂にこのようにロケフリは堂々適法と看做されることになったのです。



#### ロ) ロケーション・フリーなる機器

ケーションフリーテレビは、ソニーが販売する無線 LAN を搭載したテレビの名称。通称では呼び名が短縮され「ロケフリ」とも呼ばれている。

この製品は、映像信号をリアルタイムで MPEG-4 あるいは MPEG-2 に変換して IP (Internet Protocol) パケットとして送信することで、テレビ放送をインターネットを介してリアルタイムで視聴できるという、それまでに存在しなかったカテゴリの商品。2006年2月3日「経済産業省 第1回 ネット KADEN」大賞を受賞。



## 2) 副島さんの大満足

Outlook Express 6.0 で外出中に届いたメールを携帯電話に転送することが出来るようになった！！

この発表は殆んどどのメンバー（私も含めて）には、さほどの共感を呼ばなかったのだが、実は随分以前から矢野ドクターが夙に喧伝されていたことである。

現役世代でないMCCメンバーは、メールを外出先で見ることが出来るという副島さんの感激には着いてゆけないのも止むを得ないことではあるし、第一ケータイでメールをやっていないのだから、尚更のことなのである。

更にもう一つ、特にある特定の人からのメールを待っていて、留守中にそれが受信されている場合は、外出先でもチェックしたい、というような特定の人がないのだから、根本的に必要性が無いというに至っては、いささか情けない結論になってしまった。

しかしながら、恐らくこれをどのように可能にすることが出来るのかを、具体的に文書で示していただければ、或いは自分もやってみようとする人が出て来るかも・・・というのが、私の提案なのだが。

—以上—